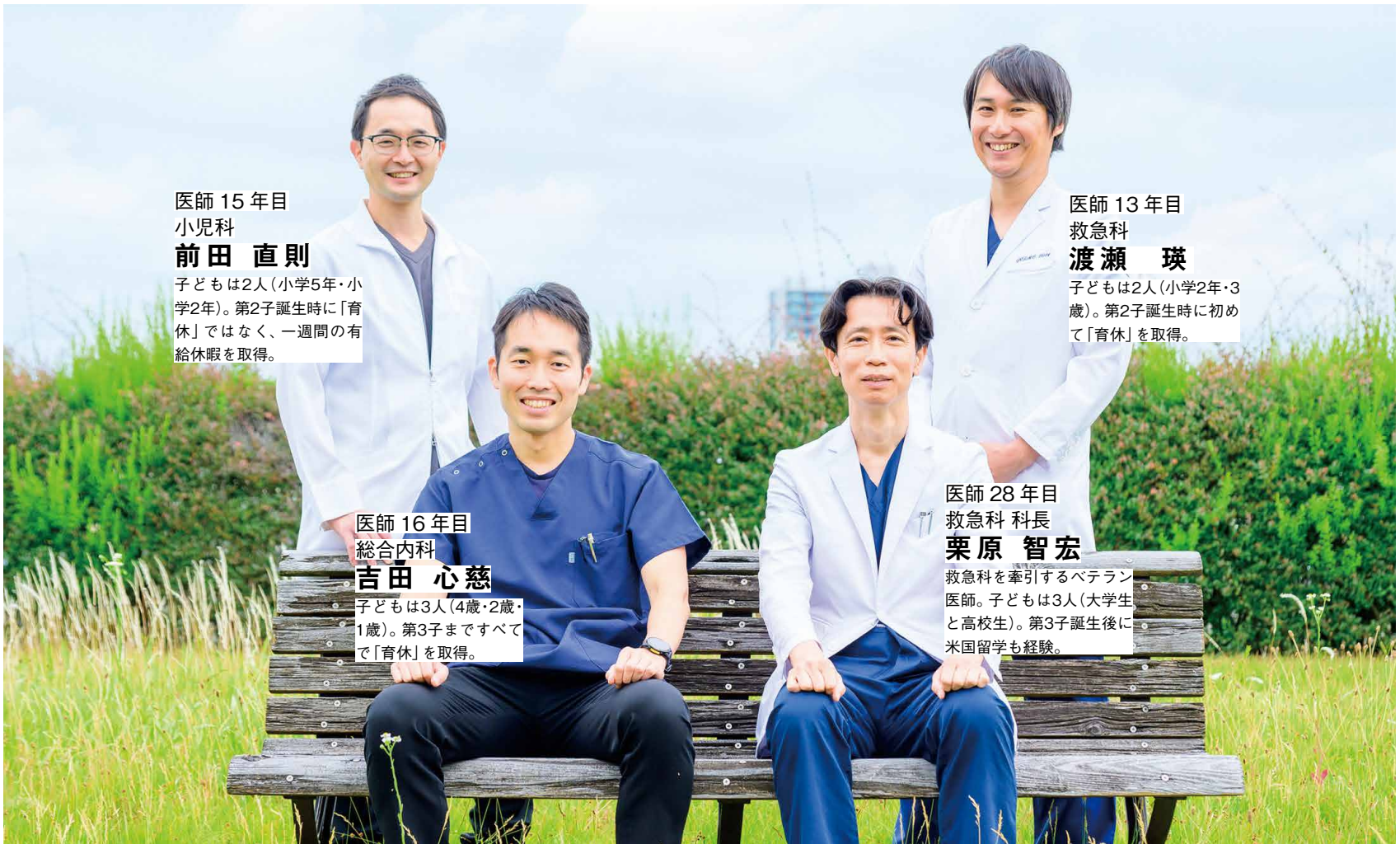
NHO TALK SESSION



特　集　スペシャル座談会企画

NHO“パパ医師”の本音座談会



近年、男性医師の育休・育児参画が広がりつつあります。しかし、多くの現場ではなお制度と実態の間にギャップが存在していますが、NHOにおける“パパ医師”たちの実情はどうなのでしょうか。本座談会では、東京医療センターから、年代、お子さんの誕生時期、診療科の異なる男性医師4名が集い、育休事情の「過去」と「現在」や、育休・育児参画の課題、キャリアへの影響などについて語り合いました。

育休は“特別”から“当たり前”へ
世代と共に変わる働き方のいま

――栗原先生が医師になった頃と比べて、現在は働き方や男性医師の育休事情は大きく変わったと思いますが、いかがでしょうか。

栗原…私が医師になった頃は、「男性が育休を取る」という発想自体がありませんでした。女性医師は出産を機に一旦退職する方も少なくなく、男性医師は仕事一本の時代でしたね。私も3人目の子ども（現在、高校1年）が生まれて10日後にはアメリカに研究留学していました（笑）。2カ月後に家族が合流しましたが、妻には大きな負担をかけましたね。ただ、留学中は時間的な余裕があり、子どもたちと関わる時間は日本にいるときよりも多く持てました。





渡瀬…現在は男性育休も広がり、救急科でも育休を取得する医師が増えています。

栗原…そうだよね。この3年間で5名が育休を取得しましたが、渡瀬先生が前例をつくってくれたことで、その後の育休取得もスムーズに進むようになったのだと思います。現在、救急科はスタッフ数も充実しており、育休取得に伴うフォローもしやすい環境が整っています。

前田…私は育休を取得したことがなく、第2子（現在、小学2年）のときは一週間ほどの有給休暇という形を取りました。当時は男性育休の過渡期で、育休を取得しやすい風潮ではなかったんですよね。

渡瀬…私も第1子（現在、小学2年）のときは救急医として駆け出しの頃でしたし、当時は働き方も完全主治医制だったこともあり育休を取得していません。一方、第2子（現在、3歳）のときは、キャリアにも余裕が生まれ、働き方もチーム制になっていましたし、男性育休の理解も進んでいた時期でした。育休経験によって、自分の子育てへの関わり方がどう変わるのかを知りたいという思いもあり、育休（1カ月）の取得を決めました。

吉田…私は3人の子ども（現在、4歳・2歳・1歳）全員に育休（第1・2子は1カ月・第3子は2カ月）を取得しました。限られた乳児期という大切な時期に子どもと深く向き合いたいという思いと、仕事中でも家庭の状況をよりリアルに想像できるようになりたいと考えたためです。当時は男性育休の風潮もほぼ定着しており、総合内科の働き方もチーム制へと移行し、業務をカバーしやすい環境が整っていたこともあり、育休は取得しやすかったですね。

――育休取得に際して、キャリアへの不安や葛藤はありましたか。

渡瀬…全くなかったです。実際、数カ月の育休でキャリアに影響が出ることはありませんよね。

吉田…そうですね。ただ、育児参画によってキャリア選択のタイミングに影響が出ることは事実です。私の場合、子どもがまだ小さいこともあり、例えば「今

から海外留学しよう」といった選択は難しくなります。男性医師の育児参画が当たり前の時代になりつつある中、キャリアに邁進したい医師にとっては、葛藤を抱える場面もあるかもしれません。



子育てに向き合う経験が医師としての力にもなる

――育休・育児を通じて得られたことや、心境の変化はありましたか。

渡瀬…育休中は保育園に通う上の子の弁当を作ったり、たくさんコミュニケーションを取ったりと、子どもと濃密な時間を過ごすことができました。そうした経験があったからなのか、保育園や学校の面談にも積極的に参加するようになりましたね。

吉田…育休中は、上の子どもたちと公園や動物園によく出かけました。そのおかげか、上の子2人はすっかりパパっ子に(笑)。今でも、できるだけ子どもたちと関わる時間をつくるようにしています。

前田…育休を取得することで、その後の家事や育児の分担がスムーズになりますし、家族の絆も深まることで、仕事のパフォーマンスにも良い影響を与えてくれると思います。それに、小児科の場合は育休の経験もキャリアの一部になります。子どもの発育や発達を実際に見てきた経験は診療に生きますし、保護者への説明や子どもとの接し方にも役立つため、小児科ではむしろ育休の取得を勧めています。

吉田…総合内科もそうですね。診療では患者さんとのコミュニケーションも重要となりますが、子育ての話題は会話が広がりやすく、患者さんとの関係づくりの潤滑剤にもなるんです。

栗原…育児に関わることで、患者さんや同僚、多職種など“他者への理解”がより深まりますよね。男性医師の育児参画の拡大は、そうした共感力や多様な価値観への理解を育むという意味でも大きな意義があると感じています。

制度が“ある”で終わらせず、“使える”環境に変えるために

――男性医師の育休・育児参画の普及には、どのような取り組みが必要だと思われますか。

栗原…最大の課題は、育休取得者の業務をどのようにカバーするかという点です。一定数のスタッフが確保されていなければ、チームで業務を分担することも現実的には難しくなります。



渡瀬…NHOのグループ病院から応援に来ていただいたり、以前勤務していた医師にスポットで手伝ってもらったり、そうした工夫があるといいですね。

吉田…研修中であっても育休を取りやすい環境づくりも大切です。以前、専攻医の男性医師が育休を取得したのですが、2週間という短い期間でした。研修中ということでキャリアの焦りもあり、長めの育休は心情的に取りにくかったのかなと思いました。

前田…小児科は所属人数が多くないものの、若手・ベテランを問わず比較的均等に当直を担当しているため、専攻医が育休を取得しても当直体制の調整がしやすく、また、過去に当院で勤務していた医師に応援を依頼するなどして対応しています。それと、育休中の連絡・相談も大切ですよね。子育て中は予期せぬ出来事が起こることも多く、育休期間の延長が必要になる場合もあります。急な連絡となると人員配置の調整が難しくなるため、育休を取得する先生には「困ったことがあればすぐに相談してね」と伝えています。

渡瀬…子育て中は、本当に予想外のことが起こりますよね。例えば、子どもを保育園に連れて行くときに突然、「履きたい靴下が見つからない」とぐずったり(笑)。その対応で、始業時間に遅れてしまうこともあります。そんなときは【時間単位年休】(有給休暇を1時間単位で分割して取得できる制度)を使うなどして対応していますが、さらに柔軟な勤務制度があれば男性医師も育児参画しやすくなるかもしれません。

吉田…私も靴下問題にはよく振り回されています(笑)。朝は子どもの世話のため、【育児時間制度】(生後1年までは1日2回・各30分以内、小学校就学前までは1日最大2時間取得可能)を利用して出勤時間を30分遅らせてもらっています。それでもわずかに遅れてしまう場合もあり、【時間単位年休】を使うなどして対応しています。



男性医師でも、“前向き”な育休・育児参画の実現へ

――NHOにおける育休や育児参画制度の“取りやすさ”はいかがでしょうか。

前田…NHOでは、育児参画に関する新しい制度や制度改正の情報はいち早くメールなどで共有されますし、実際に申請する際も上司や病院の理解もあって、使いやすいですよね。【子の看護等休暇】(子どもの世話や学校行事への参加などで取得できる休暇。2025年4月の法改正で対象年齢が小学3年生修了前まで拡大)を知ったときは、「入学式はこの制度を使って参加できる！」と思い、すごくありがたかったです。

吉田…総合内科では“お互い助け合い”の風土が根付いており、制度を使いやすい環境にあります。育休を取る先生に対しては自分事のように前のめりになりますね。「育休取るの？ いいじゃん！」みたいな(笑)。

栗原…そうした環境づくりが、ものすごく大事ですよね。

渡瀬…制度があっても使いやすくなければ意味がありません。その点、NHOには利用しやすい雰囲気があります。栗原先生には育休だけではなく、子どもの体調不良などで急な休みや、「中抜け」が必要な際も気軽に相談できますし、柔軟に対応していただいています。すごく良い環境に身を置かせてもらっているなと感じていますね。

栗原…男性医師の育休取得を当たり前にするには、職場での“お互い様”という意識の醸成がとても大切です。順番にその立場が回ってくるという理解など、誰かが休んだときにカバーし合える風土や組織体制が鍵になると思っていますし、私自身もそうした組織づくりを目指したいと思っています。

若手医師へメッセージ



東京医療センター
救急科 科長
栗原　智宏

出　身　地：東京都
出身大学：慶應義塾大学医学部(1999年卒業)
部　　活：サッカー部
座右の銘：備えあれば憂いなし

“男性育休は当たり前”の実現は周りの理解と協力があってこそ。仲間を思いやれる医師になってほしいですし、私たちも誰もが安心して育休・育児参画制度を利用できる風土・組織づくりを進めていきます。



東京医療センター
総合内科
吉田　心慈

出　身　地：岐阜県
出身大学：東京大学(2011年卒業)
部　　活：卓球部
座右の銘：「これでなくてはいけない」ということはない

育児経験は臨床の力にもなりますし、育休期間に子どもとどっぷり過ごせる時間はとても貴重です。前向きに育休を取得し、その経験を医師としての成長にもつなげてください。



東京医療センター
小児科
前田　直則

出　身　地：石川県
出身大学：北里大学(2012年卒業)
部　　活：テニス部
座右の銘：積小為大

小児科は育休の経験もキャリアとなる診療科です。積極的に育休を取得してほしいですし、仕事も家庭も大切にしながら、自分らしいキャリアを築いてください。



東京医療センター
救急科
渡瀬　瑛

出　身　地：佐賀県
出身大学：佐賀大学(2014年卒業)
部　　活：救急蘇生医療サークル
座右の銘：誠心誠意

男性であっても、自分の子どもの育児を主体的に担うのは当然のことです。育休は取得すべきだと思いますし、NHOには安心して相談できる環境があります。

職員の出産・子育て等を支援する
NHOの制度一覧